



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	レーニン, スターリンにおけるプロレタリアート独裁理論の発展
Author(s)	猪木, 正道; Inoki, Masamichi
Citation	スラヴ研究, 4, 1-17
Issue Date	1960
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4946
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113144.pdf



レーニン、スターリンにおける プロレタリアート独裁理論の発展

猪 木 正 道

1. 大衆に対する前衛党の指導＝独裁※

マルクス、エンゲルスのプロレタリアート独裁理論は、ドイツ社会民主党に受容されるや否や、修正されはじめた。実践面におけるプロレタリアート独裁理論の修正は、ベルンシュタインによる修正主義の理論化よりも、はるかに早かった。¹⁾

ロシアにマルクス主義が受容された時期は、ドイツ社会民主党内に実践的および理論的修正主義が擡頭した時期と重なっていたので、ロシアのマルクス主義は最初から異質的要素を包含していた。レーニンは、「ロシアの基本的な特殊性は、一方では自然発生的な労働運動が、他方ではマルクス主義に向っての進歩的な世論の転換が開始したその最初期が、早くもつぎのことを特徴としていたということである。それは自分でもそれと意識している異質的な諸要素が、共通の旗の下に、また共通の論敵（古くさくなった社会的＝政治的世界観）との闘争のために、連合したということである。われわれがここでいっているのは、『合法的マルクス主義』の蜜月のことである。」²⁾とのべている。

この混乱は、合法的マルクス主義あるいは経済主義の名で呼ばれるロシア型修正主義とレーニンのプロレタリアート独裁論との激突という形をとった。レーニンの『何をなすべきか？』は、ロシア型修正主義に対して、革命的マルクス主義のプロレタリアート独裁論の立場をはっきりと打ち出すために書かれたとあってよい。レーニンが合法的マルクス主義および経済主義の本質を大衆の自然発生性への拝跪としてとらえ、革命的マルクス主義の意識性を強調したことは、もっとも注目される。

レーニンは、「いやしくも労働運動の自然発生性の前に拝跪することは、いやしくも『意識的要素』の役割、社会民主主義派の役割を軽視することは、とりもなおさず——その軽視する人がそれをのぞんでいようといまいと、それには全くかわりなく——労働者に対するブルジョワ・イデオロギーの影響を強めることを意味する、ということである。『イデオロギーの過大評価』とか意識的要素の役割の過大視とか等々を論じる人々は、皆労働者が『自分の運命を指導者達の手からもぎとり』さえすれば、純労働運動は独力で独自のイデオロギーを作りあげることができるし、また現に作りあげつつある、と想像しているのである。だがこれはひどい間違いである。」³⁾と警告したあとで、革命的マルクス主義の任務が自然発生性との闘争に存することを次のように説いている。

「労働者大衆自身が彼らの運動の行程それ自体の間に独自のイデオロギーを作り出すということが考えられない以上は、問題はこうでしかありえない、——ブルジョワ・

イデオロギーか、それとも社会主義的イデオロギーかと。そこには中間のものはない(なぜなら、人類はどんな『第三の』イデオロギーをも作り出さなかったし、それにまた総じて、階級矛盾によって引き裂かれている社会に階級外のまたは超階級的なイデオロギーなどは決してありえないからである。)だからいやしくも社会主義的イデオロギーを軽視すること、いやしくもそれから離反することは、とりもなおさずブルジョワ・イデオロギーを強めることを意味するのである。自然発生性をうんぬんする人々がいる。しかし労働運動の自然発生的な発展は、まさに運動をブルジョワ・イデオロギーに従属させる方向に進み、ほかならぬ『クレード』の綱領に従って進むのである。なぜなら自然発生的な労働運動とは組合主義トレードユニオンイズムであり、Nur Gewerkschaftlerei であるが、組合主義とはまさしくブルジョワジーによる労働者の思想的奴隷化を意味するからである。だからわれわれの任務、すなわち社会民主主義者の任務は、自然発生性と闘争すること、ブルジョワジーの庇護のもとに入ろうとする組合主義のこの自然発生的な志向から労働運動をそらして、革命的社会民主主義の庇護のもとに引き入れることである。⁴⁾

では、労働者階級の自然発生的組合主義に対して、革命的マルクス主義の意識性を押し出すのには、どうすればよいか？ レーニンは労働者階級の中へ、労働者階級の外から革命理論ないし革命イデオロギーを持ち込む以外にはないと考えた。この点について、レーニンは実にはっきりと次のようにのべている。「われわれは今労働者は社会民主主義的意識を持っているはずもなかったといった。この意識は外部からしかもたらしえないものだった。労働者階級が、まったく自分の力だけでは、組合主義的意識、すなわち組合に団結し、雇い主と闘争を行い、政府から労働者に必要なあれこれの法律の発布をかち取るなどのことが必要だという確信しか作りあげえないことは、総べての国の歴史の立証するところである。他方社会主義の学説は、有産階級の教養ある代表者であるインテリゲンツィアによって仕上げられた哲学・歴史学・経済学上の諸理論の内から、成長してきたものである。近代の科学的社会主義の創始者であるマルクスとエンゲルス自身も、その社会的地位からすれば、ブルジョワ・インテリゲンツィアに属していた。ロシアでもそれとまったく同様に、社会民主主義派の理論的学説は、労働運動の自然発生的成長とはまったく独立に発生した。それは革命的・社会主義的インテリゲンツィアの間で思想の発展の自然の、不可避的な結果として発生したのである。」⁵⁾

ここにレーニンの知的アリストクラシーがはっきりと表明されている。そしてこの知的アリストクラシーこそ、大衆に対する党の指導ないし独裁を正当化している根拠なのである。レーニンはこのような知的アリストクラシーにもとずいて、職業的革命家によって構成される前衛党の必要性を次のように要約している。

「(1) 確固たる、継続性を保った指導者の組織がないなら、どんな革命運動も恒久的なものとはなりえない。(2) 自然発生的に闘争に引き入れられて、運動の土台を構成し、運動に参加してくる大衆が広範になればなるほど、こういう組織の必要はいよいよ緊急となり、またこの組織はいよいよ恒久的でなければならぬ(なぜなら、その時にはあらゆる組織のデマ広告が大衆の未熟な層をまどわすことがいよいよ容易になるからである。)(3) この組織は、職業的に革命的運動にしたがう人々から主として成り立たなければならぬ。(4) 専制国では、職業的に革命的活動にしたがって、政治警察と闘争

する技術について職業的訓練をうけた人々だけを参加させるようにして、この組織の成員の範囲をせまくすればするほど、この組織を『とらえつくす』ことはますます困難になり、また (5) 労働者階級の出身であると、その他の社会階級の出身であるとを問わず、運動に参加し、その中で積極的に活動できる人々の範囲が、ますます広がるであろう。』⁶⁾

このような前衛党の概念を明確に打ち出したところに、レーニンのプロレタリアート独裁論をマルクス、エンゲルスのそれから区別する決定的な要因があったと考えられる。マルクス、エンゲルスは、「共産主義者は、他の労働者党に対して、特殊な党ではない。」⁷⁾ といい、また「共産主義者は、実践的には、すべての国々の労働者党のもっとも断固とした、常に推進的な部分である」⁸⁾と説いている。すなわちマルクス、エンゲルスのプロレタリアート独裁論では、共産主義者は「特殊な党」を形成せず、労働者党内における前衛であるものと考えられていた。レーニンが『何をなすべきか?』において展開した職業的革命家による前衛党という考え方は、プロレタリアート独裁を前衛党の独裁という形で具体化したわけであり、マルクス・レーニン主義のプロレタリアート独裁論にとって画期的な一歩前進を意味していた。前衛党が労働者階級の外から、労働者階級の中へプロレタリアート独裁のイデオロギーを持ち込むというレーニンの考え方は、ベルンシュタインとは正反対の方向へのマルクス主義の修正にほかならないと説く見解もあるほどである。⁹⁾

マルクス主義の理論（意識性）と現実（自然発生性）とが矛盾した場合、三つの途が考えられよう。第一は現実に接近するために理論を修正する途である。ベルンシュタインやロシアの合法的マルクス主義者達はこの途を選んだ。レーニンがこれを自然発生性への拝跪と呼んだことは、すでに見たとおりである。第二は理論と現実との矛盾をごまかす途であって、カウツキーのように革命的な空辞と改良主義的な実践とを両立させてゆく陰性修正主義にほかならない。第三の途は理論（意識性）の優位を徹底させるために、大衆に対する前衛党の指導によって、自然発生的な現実を克服しようとする。第一の途が今日の民主的社会主義へ通じているのに対して、第三の途がレーニンの途であったことはいうまでもあるまい。そして第二の途は民主的社会主義と共産主義との中間に位置したいろいろの立場に通じている。

※スターリンは『レーニン主義の諸問題によせて』の中で、「レーニンは党の独裁という言葉¹⁾を、厳密な意味（「強力に立脚する権力」）ではなく、転化した意味で、つまり「完全な」指導という意味でつかっているのである。」と説いている。（全集第8巻26頁）しかし、独裁概念が広狭二義に用いられ、しかもこの両義がしばしば巧みにすりかえられるところにレーニン、スターリンの特徴がある。前衛党が後にのべるように歴史法則の執行者をもつて自認している場合、指導はいつでも強力に立脚する指導すなわち、狭義の独裁に転化するからである。

註

- 1) 1957年度政治学年報所載の拙稿「マルクス主義と大衆意識」参照
- 2) レーニン全集第5巻（日本訳）379頁
- 3) 同上 404頁
- 4) 同上 406頁

- 5) 同上 395—6頁
- 6) 同上 499頁
- 7) 共産党宣言(岩波文庫版) 57頁
- 8) 同上 57頁
- 9) Bulletin, vol. VI, July 1959 所載の Herman Achminov, The perennial problem of revisionism 参照

2. 党員に対する党機関の独裁

前衛党組織論によって、メンシェヴィキとたもとを別つた後も、ボリシェヴィキ党内には、いろいろの問題をめぐる対立抗争があった。1917年の2月革命後にかぎって見ても、まずレーニンの4月テーゼに対するカーメネフなどの反対があり、ついで9月から11月にかけては、蜂起問題について、レーニン、トロツキー対ジノヴィエフ、カーメネフのはげしい理論闘争が行われた。この対立はソヴェト政権の成立後まであとをひき、1917年11月16日にはレーニンの手で、「ロシア社会民主労働党(ボ)中央委員会の少数派に対する多数派の最後通牒」¹⁾が執筆されるにいたつた。しかし少数派の屈伏により、党は辛うじて分裂をまぬがれた。

ついで1918年の1月から3月はじめまで、ボリシェヴィキ党はブレスト・リトウスクの講和問題をめぐって、分裂の危機に直面した。即時講和を主張するレーニンは、トロツキーなど中間派の棄権により、ようやくブハーリンなど左翼共産主義者の反対を押し切ることができた。内戦と外国の武力干渉とに対して、ソヴェト政権が悪戦苦闘する段階においては、いわゆる軍事反対派が擡頭した。1919年末に、ソヴェト国家の中央集権化がほぼ完了したころには、民主的中央集権派が現われ、また労働組合を基盤とする労働者反対派が、党機関の官僚的支配に抗して立ちあがった。²⁾このような党内の対立抗争は、1920年から1921年にかけて、中央委員会内部の人的派閥争いとも結んで、労働組合問題をめぐる理論闘争という形で表面化した。特に1921年3月に勃発したクロンシュタットの水兵暴動事件は、ボリシェヴィキ党がいかに大きな危機に臨んでいるかを示した。

クロンシュタット事件のさなかに開催されたロシア共産党第10回大会の第1日(3月8日)に、レーニンは中央委員会の政治活動について報告した。レーニンは、ボリシェヴィキ党が党員数50万を数える大衆党となり、党の隊列外におこったことを党内に反映せざるをえない点を指摘したのちに、³⁾クロンシュタット事件が小ブルジョワ的、無政府主義的自然発生性にもとづいている点を次のように強調している。

「それと同時にこの運動が小ブルジョワ的反革命に、小ブルジョワ的・無政府主義的自然発生性に帰着することは、まったく明らかである。これはなんといっても新しいことがらである。あらゆる危機と結びついているこの事情を、政治的にきわめて注意深く考慮し、きわめて綿密に検討しなければならない。そこには自由商業のスローガンをかかげいつでもプロレタリアートの独裁に反対してきた小ブルジョワ的・無政府主義的自然発生性があらわれている。しかもこの気分は非常に広くプロレタリアートに反映したのである。それはモスクワの諸企業に反映したし、地方のいくたの場所にある企業に反映した。この小ブルジョワ的反革命は、疑いもなくデニキン、ユデニッチ、コルチャッ

クを合せたよりも危険である。⁴⁾

ここでレーニンが小ブルジョワ的自然発生性にプロレタリアート大衆がおし流されたところに、危機の根因を見出していることは、もっとも注目される。自然発生性におし流されたのは、しかし党外のプロレタリアートだけではなかった。クロンシュタット事件の経過が示しているように、党もまた自然発生性におし流されたのである。⁵⁾レーニンは、大会第2日目の中央委員会報告結語の中で、「私は、この小ブルジョワ的・無政府主義的反革命の思想やスローガンと、『労働者反対派』のスローガンとの間には関連があると主張する。」⁶⁾とのべている。

このような認識にもとづいて、レーニンが導き出した解決策は、「党内のサンジカリズム的および無政府主義的偏向についての決議案」と「党の統一についての決議案」とであった。

サンジカリズム的および無政府主義的偏向についての決議案は、まずサンジカリズム的および無政府主義的「偏向はプロレタリアートに対する、またロシア共産党に対する小ブルジョワ的自然発生性の影響によるものである」⁷⁾ことを強調したのちに、「マルクス主義が教えるところによれば、労働者階級の政党、すなわち共産党だけがプロレタリアートおよび勤労大衆全体の前衛を統合し、育て、組織することができるのであって、この前衛だけが勤労大衆の避けられない小ブルジョワ的動揺やプロレタリアートの間の職業組合的な偏狭さ、あるいは職業的偏見の避けられない伝統や再発に対抗でき、プロレタリアート全体の統合された活動全体を指導すること、すなわちプロレタリアートを政治的に指導し、プロレタリアートを通じて勤労大衆全体を指導することができるのである。これなしにはプロレタリアートの独裁は実現できない。」⁸⁾とのべ、最後に「これらの思想の宣伝は、ロシア共産党に所属することとあいられない」⁹⁾と断定している。

党の統一についての決議案は、「一連の事情のため国内の小ブルジョワ的住民の間に動揺が強まっている現在では、党の隊列の統一と団結をはかり、黨員相互の完全な信頼を確保し、さらにプロレタリアートの前衛の意志の統一を実際に具現した真に協力一致した活動を確保することが特に必要である。」¹⁰⁾と書き出して、その第7項において次のような具体的対策を打ち出している。

「党内に、またソヴェトの全活動のうちに厳格な規律をうちたてるため、またあらゆる分派結成を排除して、もっとも大きな統一をなし遂げるために、大会は規律の違反とか、分派の発生や黙認とかの場合には、党からの除名を含むあらゆる党処罰の措置をとり、また中央委員については中央委員候補に格下げすとか、非常措置としては、党から除名さえする全権を中央委員会に与える。中央委員や中央委員候補や統制委員に対して、そのような非常措置をとる条件は中央委員候補全員および統制委員全員を参加させた中央委員会総会を召集することでなければならない。党のもっとも責任ある指導者達のこのような総会が、中央委員を中央委員候補に格下げしたり、党から除名することを必要だと、三分の二の多数で認めるなら、そのような措置はただちに実行されなければならない。」¹¹⁾

この決議第7項は、レーニンが両決議案についての報告の結語で認めているように、

文字通りの非常措置であった。「大会で選挙された中央委員会が中央委員を排除する権限を持つというようなことを、どんな民主制も、どんな中央集権制も、決して許さないであろう。……大会が中央委員会を選出し、これに最高の信頼を表明し、これに指導権をゆだねる。そこで中央委員会が自己のメンバーに対して、そういう権限を持つというようなことを、わが党はかつてどこでも許したことはない。これは非常措置であって、情勢が危険なことを意識して、特に適用されるのである。」¹²⁾と、レーニンも、その例外性、非常性を強調している。しかし、ともかくもこの非常措置を可決することによって、ポリシェヴィキ党は、黨員に対する党機関の独裁を承認したものといわなければならぬまい。プロレタリアート大衆に対する前衛党の独裁が、自然発生性に対する意識性の優位によって正当化されたように、黨員大衆に対する党機関の独裁もまた自然発生性に対する意識性の優位によって正当化されている。この点は特に注目しなければならない。

註

- 1) レーニン全集第 26 巻 285 頁以下
- 2) ポリシェヴィキ党内における反対派の活動については、Leonard Schapiro, *The origin of the communist autocracy*, 1955, pp. 32-110 および pp. 211-342. に詳しい。
- 3) レーニン全集第 32 巻 184 頁
- 4) 同上 191 頁
- 5) クロシュタット党組織に属する黨員の少くとも 30% は暴動を支持し、40% は中立的態度をとつたといわれる。Schapiro, *op. cit.*, p. 303 参照
- 6) レーニン全集第 32 巻 202 頁
- 7) 同上 256 頁
- 8) 同上 257 頁
- 9) 同上 259 頁
- 10) 同上 252 頁
- 11) 同上 255 頁
- 12) 同上 271 頁

3. 独裁権力の創造性

—— 一国社会主義の論理 ——

1905 年の 6 月から 7 月にかけて執筆された『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』において、レーニンは当面のロシア革命のブルジョワの性格をはっきりと認めつつ、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁というスローガンを次のように説明している。

「これに反して、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁というわれわれのスローガンは、この誤りから完全に守ってくれる。われわれのスローガンは、革命が無条件にブルジョワ的な性格のものであり、もっぱら民主主義的な変革の枠を直接には越えることができないことを認めながらも、この当面の変革をおしすすめ、この変革にプロレタリアートにとってもっとも有利な形態をあたえることをめざしており、したがって、社会主義のためのプロレタリアートの今後の闘争に最大の成功をおさめるために民主主義的変革を最大限に利用することをめざしているのである。」¹⁾

プロレタリアートと農民との革命的民主主義的独裁は、ポリシェヴィキ党の最小限綱

領である民主主義革命を推進することを任務としていた。社会主義革命に対する条件は、ロシアではまだ成熟していないものと考えられており、ロシア革命がヨーロッパの社会主義革命を触発した場合に、ヨーロッパの労働者が「どういうふうにやるべきか」をロシアのプロレタリアートに示すだろうと期待されていた。²⁾ この点に関するかぎり、1905年のレーニンは、トロツキーの永久革命論と同じ立場に立っていたといつてよい。

第一次世界大戦中に、レーニンは帝国主義を研究して、資本主義の経済的および政治的発展の不均等性に注目し、そこから、「社会主義の勝利は、はじめは少数の資本主義国で、あるいはただ一つの資本主義国でも可能である」という結論が出てくる。この国の勝利したプロレタリアートは、資本家を収奪し、自国に社会主義的生産を組織した後、他の資本主義世界に対して立ち上がり、他の国々の被抑圧階級を自分の方に引きつけ、それらの国内で資本家に対する蜂起を起こし、必要な場合には、武力に訴えても搾取階級とその国家に反対して行動するであろう。³⁾ という帰結をひき出した。

しかし、この一国の中にロシアが含まれていないことは、『ヨーロッパ合衆国のスローガンについて』という論文の文脈全体からも推測される。またこの論文の50日後に、同じくソツィアル・デモクラート誌に発表された『いくつかのテーゼ』が、その第五テーゼにおいて、「ロシアにおける当面の革命の社会的内容となりうるものは、プロレタリアートと農民との革命的民主主義的独裁だけである。」⁴⁾ と断定した後に、第六テーゼで「ロシアのプロレタリアートの任務は、ロシアのブルジョワ民主主義革命を最後まで遂行し、こうしてヨーロッパにおける社会主義革命に火をつけることである。」⁵⁾ とのべていることによっても、ロシア革命の性格についてのレーニンの考えが変わっていないのを確認できよう。

1917年のいわゆる4月テーゼは、議会制共和国を排して、ソヴェト共和国をとり、⁶⁾ 国内のすべての銀行をただちに単一の全国的銀行に統合し、それに対する労働者代表ソヴェトの統制を実施する⁷⁾、などと革命独裁の経済政策を明確に打ち出した。しかし第八テーゼが「われわれの直接の任務は、社会主義を『導入』することではなくて、社会的生産と生産物の分配に対する労働者代表ソヴェトの統制にいますぐ移ることにすぎない。」⁸⁾ とのべていることによっても知られるように、4月テーゼにおいても、社会主義はロシア革命の当面の課題になっていない。1917年4月に執筆され9月に公刊された小冊子『わが国の革命におけるプロレタリアートの任務』は、4月テーゼよりも一そう詳細にレーニンの考えを示している。2月革命を評価して、レーニンはこの論文の中で、次のようにのべている。

「1917年3月のロシア革命は、ツァーリ君主制全体を一掃しただけでなく、また全権力をブルジョワジーにひき渡しただけでなく、さらにプロレタリアートと農民の革命的民主主義独裁のすぐまぎわまで到達した。ペトログラドその他の地方の労働者・兵士代表ソヴェトは、まさにこういう独裁（すなわち法律に基礎をおかず、武装した住民大衆の直接の強力に基礎をおく権力）であり、しかもまさに前記の諸階級の独裁である。」⁹⁾

すなわちソヴェトの独裁は、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁の具体化としてとらえられていることは明らかである。同じ論文の中で、レーニンは、ロシア

のような「小農の国では、プロレタリアートの党は、住民の圧倒的多数が社会主義革命の必要を認識しないうちは、決して社会主義の導入を目標とすることはできない。」¹¹⁰⁾とのべ、「土地の国有化やすべての銀行と資本家のシンジケートの国有化、あるいは少くともそれらに対する労働者代表ソヴェトの即時の統制実施等々のような方策は、決して社会主義の『導入』ではない。」¹¹¹⁾と説いている。

1917年9月に執筆され、10月末に刊行された論文『さし迫る破局、それとどう闘うか』においては、レーニンは社会主義に向って進むことを恐れてはならないと強調し、さらに、「社会主義とは、全人民の利益を目指すようになった、そしてその限りで、資本主義的独占でなくなった国家資本主義的独占にほかならないのである。」¹¹²⁾とまでべている。しかしこれは、国家資本主義的独占が当時のロシアにおいて占めていた割合に鑑みても、単にロシア革命の進むべき方向を示したものというべきであろう。

レーニンをはじめボリシェヴィキ党の最高指導者達のロシア革命観が、10月革命後においても、変化していなかったことは、1924年4～5月にプラウダに発表されたスターリンの論文『レーニン主義の基礎について』によって知ることができる。すなわちスターリンはそこで、ロシアのような農民国の努力だけでは、社会主義的生産を組織することができないと次のように断定している。

「しかしブルジョワジーの権力を倒して、一国内にプロレタリアートの権力を打ちたてただけでは、まだ社会主義の完全な勝利を確保したことにはならない。社会主義的生産を組織するという、社会主義の主要な任務が、まだ将来に残されている。いくつかの先進国のプロレタリアートの共同の努力がなくても、この任務を解決することができるだろうか、一国で社会主義が最後の勝利を勝ち取ることができるだろうか。いや、できない。ブルジョワジーを打ち倒すためならば、一国の努力だけで十分である。このことは、わが国の歴史がものがたっている。だが社会主義が最後的に勝利するためには、すなわち社会主義的生産を組織するためには、一国の、ことにロシアのような農業国の努力だけでは、不十分である。このためには、いくつかの先進国のプロレタリアートの努力が必要である。」¹¹³⁾

ロシアのような後進農業国の努力だけでは、社会主義生産を組織することはできないというスターリンの命題は、「ある社会形態は、その中におさまれるだけの生産諸力が全部展開しつくすまでは決して没落しないし、新しい、一層高度な生産関係は、そのための物質的生存条件が旧社会の胎内に成熟し終るまでは、決してとってかわらない」¹¹⁴⁾というマルクス主義の基本命題を前提するかぎり、当然の帰結といわなければならない。

ところがスターリンは、1924年12月に、『10月革命とロシア共産主義者の戦術』という論文を書いて、ロシア一国における社会主義の可能性を肯定した。スターリンが変説の根拠としたのは、さきに引用したレーニンの論文『ヨーロッパ合衆国のスローガンについて』であった。この論文でレーニンが一国における社会主義の勝利について語っているのはたしかだが、その一国が文脈から見てロシアのような後進国を意味していないことについては、さきにふれたとおりである。しかるに、スターリンは、わずか7カ月前にみずからのべた理論をば、日和見主義者の説であるとききおろし。¹¹⁵⁾ロシア一国に

においても、完全な社会主義社会を建設できると 180 度の転回を行っている。そして「いくつかの国のプロレタリアートの共同の努力」によってしか可能でないのは、「古い秩序の復活を阻止する完全な保障」という意味における「社会主義の完全な勝利」であると説いた。つまりスターリンは、社会主義の勝利という問題をば、(1) 一国で完全な社会主義社会を建設しとげることができるかどうかという国内面の問題と、(2) ブルジョワの秩序の復活を阻止する完全な保障という国際面の問題とに巧みに分割することによって、¹⁶⁾ 一国社会主義の不可能性から可能性へと変説した。

このスターリンの変説は、マルクス主義の歴史においてまことに画期的なものといってよく、右に引用した史的唯物論の基本命題は、スターリンによって根本的にくつがえされたのである。スターリンは、「新しい、一層高度な生産関係」をば、「そのための物質的生存条件が旧社会の胎内に成熟し終」らないうちに、生み出そうと決心したわけである。ではどのようにして、不可能は可能とされるか？ このことは、スターリンが変説の今一つの根拠として引用しているレーニンの『協同組合について』の次の一節が示唆している。

「事実、すべての大規模な生産手段に対する国家の権力、プロレタリアートの手にある国家の権力、このプロレタリアートと幾百万の小農民および零細農民との同盟、そして農民に対する指導権がこのプロレタリアートに確保されていることなど、これこそ、われわれがかつて小商人的であると軽蔑してきたし、また、ある一面から見れば、現在ネップのもとでやはり軽蔑する権利を持っている協同組合から、しかり協同組合だけから出発して、完全な社会主義社会を建設するために必要なすべてのもの——欠くことのできないすべてのものではあるまいか。これはまだ社会主義社会の建設ではないが、この建設のために必要で十分なすべてのものである。」¹⁷⁾

ここでレーニンが強調しているのは、プロレタリアートの独裁権力の創造性であるといつてよからう。「新しい、一層高度な生産関係」のための「物質的生存条件」をば、独裁権力によって、上から創造しようというのである。こうして、レーニンとスターリンとは、ヨーロッパにおけるプロレタリアートの敗北という現実に直面して、社会主義社会の実現に対する物質的條件の成熟を強調するマルクスの史的唯物論を否定し、権力の創造性¹⁸⁾を主張するブランキヤ一部のナロードニキ¹⁹⁾の立場に復帰したのである。独裁権力の創造性を認めることにより、前衛党は歴史法則の助産婦から産婦へ、歴史法則の促進者から執行者へと転化する。²⁰⁾

註

- 1) レーニン全集第9巻81頁
- 2) 同上 第8巻285頁
- 3) 同上 第21巻352頁
- 4) 同上 417頁
- 5) 同上 417頁
- 6) 同上 第24巻5頁
- 7) 同上 6頁
- 8) 同上 6頁
- 9) 同上 43頁
- 10) 同上 57頁
- 11) 同上 57頁

- 12) 同上 第25巻385頁
- 13) スターリン全集(日本訳)第8巻84頁
- 14) K. Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, 11. Aufl. S. LVI
- 15) スターリン全集第6巻388頁
- 16) 同上 第8巻86頁
- 17) レーニン全集第33巻488頁
- 18) ベルンシュタインは、ブランキズムの本質を革命的政治権力の無限の創造力に関する理論であると規定している。
E. Bernstein, Die Voraussetzungen des Sozialismus, 1923, S. 62
- 19) Б. Б. Глинский, Революционный период русской истории, часть первая, 1913, стр. 509 以下参照
- 20) Hannah Arendt, Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft, 1955, S. 557 参照

4. 社会主義的原始蓄積

新しい、一層高度な生産関係に対する物質的条件を上から創造するという独裁権力の課題は、先進資本主義諸国において初期資本主義が果した資本の本源的蓄積ないし原始蓄積をば、独裁権力みずからの責任で遂行することにほかならない。この原始蓄積は、資本主義的生産関係のための物質的条件を用意するものではなく、社会主義的生産関係のためにその物質的条件を準備しようというのであるから、社会主義的原始蓄積と呼ぶべきであろう。

社会主義的原始蓄積という考え方を最初に採り上げたのはトロツキーであった。¹⁾トロツキーは早くも1922年10月11日の共産主義青年同盟第五回大会において、社会主義的原始蓄積の必要を説いている。正常な拡大再生産に移行する前に、初期資本主義が、ヨーマンの収奪、植民地の略奪、海賊行為、極度の低賃銀等の方法によつて資本の原始的蓄積を行ったことは、マルクスが資本論第1巻において明らかにしたところである。社会主義的原始蓄積が海賊行為や植民地の略奪を行うことができないのは明かである。そうすると、農民と労働者との搾取が社会主義的蓄積の主要な源泉ということにならざるをえない。トロツキーは主として労働者階級の自己犠牲に訴えた。彼は「自己搾取」を労働者に強制することには反対であつて、あくまで労働者階級の自発的協力にまっべきものと考えた。²⁾

トロツキーの社会主義的原始蓄積という考え方をば一層発展させたのは、プレオブラジェンスキーであった。彼は1924年発行の共産主義アカデミー通報第8号(Вестник Коммунистической Академии)に『社会主義的蓄積の基本法則』と題する論文を寄稿し、資本主義的原始蓄積と対比しながら、社会主義的原始蓄積の法則を展開した。プレオブラジェンスキーによれば、ソ連のような農民国家では、農民や手工業者の余剰生産物の一部を搾取することなしには蓄積できないのであり、「社会主義経済が農民を含む小ブルジョワの財源に手をふれないで発展できると考えることは、疑いもなく反動的な、小ブルジョワ的なユートピアである。社会主義国家の任務は、小ブルジョワ生産者達から資本主義がとったよりもより少くすることに存するのではなくて、国の小規模生産を含む一切の合理化によつて、小生産者達に保障される一層大きな所得の中からより多くをとることにある。」³⁾

労働者階級に自己犠牲を要求するトロツキーの社会主義的原始蓄積論は、ネップ初期のロシア・プロレタリアートの共感をうることができなかった。他方農民の余剰生産物を社会主義的原始蓄積の主たる源泉にしようとするプレオブラジェンスキーの社会主義的原始蓄積論は、労働者と農民との同盟を中核とするレーニン主義への挑戦として、スターリン、ブハーリンの主流派からはげしく攻撃され、プレオブラジェンスキーとその同志であるトロツキーの墓穴を掘ることとなった。

ところが、1926年4月には、スターリンは『ソ連の経済情勢と党の政策について』という論文を書き、社会主義的原始蓄積についてのトロツキーとプレオブラジェンスキーとの考え方を採り入れた。スターリンは、「社会主義的蓄積の諸問題」という節で、次のように説いている。

「われわれは、わが工業を前進させなければならない。われわれは、わが工業をできるだけ早いテンポで拡張し、労働者の数を二倍、三倍とふやさなければならない。われわれは、わが国を農業国から工業国に転化させなければならない。しかもそれは早ければ早い程よい。しかしすべてこうしたことのためには、大きな資本が必要である。

だから工業の発展のために必要な蓄積の問題、すなわち社会主義的蓄積の問題は、今われわれにとって最も重要な意義をもっているのである。われわれは一人うち捨てられ、外部からの借款がないのに、工業化の方針を実行するために必要な、また、わが国における社会主義建設の勝利のために必要な蓄積と予備とを、わが国の内部の力を基礎として、わが工業のために確保することができるだろうか。われわれはそれを確保する状態にあるだろうか？

これは特に注目すべき重大な問題である。歴史上にはさまざまな工業化の方法がある。イギリスが工業化されたのは、数十、数百年に渡って植民地を略奪し、そこから『追加』資本をかき集め、それを自国の工業に投下して、自国の工業化のテンポを早めたおかげであった。これは工業化の一つの方法である。

ドイツが自国の工業化を早めたのは、前世紀の70年代にフランスとの戦争に勝利を占めた結果として、フランス人から50億フランの償金を奪い、それを自国の工業につぎこんだからである。それは工業化の第二の方法である。

この二つの方法は、いずれもわれわれには許されない、というのはわれわれはソヴェトの国家であり、植民地略奪や略奪をねらう軍事的侵略は、ソヴェト権力の本質とあいれないからである。

ロシアは、旧ロシアは、借金奴隸的な利権を譲り渡したり、借金奴隸的な借款をもらつたりして、次第に工業化の道にのり出そうと努めた。これは第三の方法である。しかし、それは借金奴隸になるか、なかば借金奴隸になる道であり、ロシアを半植民地にしてしまう道である。この道もまたわれわれには許されない。というのはわれわれがありとあらゆる干渉者どもを撃退しながら、3年に渡って国内戦を行ったのは、あとで、すなわち干渉者どもに勝ったのちに、自分から帝国主義者の借金奴隸になるためではなかったからである。

残っているのは、工業化の第四の道、すなわち工業のために自分自身の貯蓄をもつ道、同志レーニンが、わが国の工業化の唯一の道として幾度も指摘した、社会主義的蓄

積の道である。

それでは社会主義的蓄積にもとづくわが国の工業化は可能であろうか。

われわれは工業化を保障するのに十分な、このような蓄積の源泉をもっているだろうか。しかり、それは可能である。しかり、われわれはそうした源泉をもっている。

私は10月革命の結果、わが国で地主、資本家が収奪され、土地や工場や製造所などの私有が廃止され、それらが全人民的所有に移されたというような事実をあげることができよう。この事実が充分堅実な蓄積の源泉であることは、論証するまでもあるまい。

私はさらに、ツァーリの負債を破棄して、わが国民経済の肩から数10億ルーブリの負債を下したというような事実をもあげることができよう。この負債を残しておいたならば、われわれは利子だけでも毎年数億を支払って工業に害を与え、わが国民経済全体に害を与える破目におちいったであろうということを、忘れてはならない。この事情が、われわれの蓄積を大いに楽にしたことはいうまでもない。

私はすでに復興し、現に発展しつつあり、そして工業がさらに発展するのに必要ないくらかの利潤をあげている、われわれの国有化された工業を指摘することができよう。これもまた蓄積の源泉である。

私はいくらかの利潤をあげ、したがって蓄積のある源泉となっている、われわれの国有化された外国貿易を指摘することができよう。これもまた一定の利潤をあげて、蓄積のある源泉となっている、ある程度まで組織化された、わが国営国内商業をもあげることができよう。一定の利潤をあげて、力なみにわが工業を養っている、国有化された、わが銀行組織のような蓄積の原動力を指摘することができよう。

最後に、国家予算をつかって、国民経済一般の、特にわが工業の今後の発展のために、ささいな金銭を集めている国家権力という武器を、われわれはもっている。

以上が大体において、われわれの「国内蓄積のおもな源泉である。」⁴⁾

ここでスターリンは、プロレタリアートの自己搾取とか、農民の余剰生産物の収奪というような露骨な表現は用いていない。国家権力については、「国家予算をつかって、国民経済一般の、特にわが工業の今後の発展のために、ささいな金銭を集め」というきわめて控え目な役割をあてがっているに過ぎない。しかしツァーリの負債を破棄することによって浮いた蓄積の源泉は、プロレタリアートと農民とがうみだす「余剰価値」にはほかならないことを思えば、ソヴェトの独裁権力がツァーリ権力と旧地主、資本家に代って搾取の任に当らなければならないことは、明かである。ここに、ソ連のいわゆるプロレタリアート独裁権力が^レなることになった新しい課題が存している。資本主義的原始蓄積が経済外的強制を^レてこととしていたように、社会主義的原始蓄積もまた経済外的強制を本質とせざるをえなかったのである。

註

- 1) トロツキーは、この表現を最初に用いたのは、ウラディミル・スミルノフだといっている。I. Deutscher, *The prophet unarmed*, 1959, p. 46
- 2) Л. Троцкий, *Сочинения*, XXI, стр. 294 ff
- 3) E. H. Carr, *Socialism in one country*, vol. I, p. 203 から引用
- 4) スターリン全集第8巻152—5頁

5. 階級闘争の激化と国家権力の強化

社会主義的原始蓄積の問題は、ソ連では公式的には社会主義建設の問題として採り上げられた。スターリンは、1928年7月のソ連共産党中央委員会総会において、「ソ連における社会主義建設の諸問題」を論じ、「孤立した中小農民経営を統合して、新しい技術にもとづき、トラクターおよびその他の農業機械にもとづいて活動する、全く自由意志による団体としての、大規模の集団経営および共同耕作組合にすること」¹⁾が、必要であると説いている。ここでは自由意志が強調されているけれども、右の引用のすぐあとのところで、「農民を労働者階級に近づけ、農民を教育しなおし、個人主義者の心理を作りなおし、これを集団主義の精神で作るかえ」²⁾るとしていることから見ても、集団化が上からの説得と強力な勧奨を伴ったのは、明かであろう。

ソ連が第一次5カ年計画の下に、大規模な集団化に移ろうとした時、スターリンは社会主義建設における「自然成長論」を批判して、社会主義的大経営を農村にうえつける必要を次のように説いている。

「この理論の作者たちは、大体次のように主張している。かつてわが国には資本主義があって、工業は資本主義的基礎の上に発達し、他方農村は、資本主義的都市に似せて改造されながら、自然成長的に、ひとりで資本主義的都市のうしろについていった。もし資本主義のもとで、こういうことが起ったのなら、どうしてソヴェト経済のもとでも、それと同じことがおこらないわけがあるだろうか。どうして農村は、小農民経営は、社会主義的都市に似せて自然成長的に改造されながら、ひとりで社会主義的都市のうしろからついていけないわけがあるだろうか。こういう根拠にたって、この理論の作者たちは、農村はひとりで社会主義的都市のうしろからついていくことができる」と主張する。ここから、つぎの問題が生れる。もし農村がこのように社会主義的都市のうしろから、ついていくことができるのなら、われわれがソフホーズやコルホーズをつくることにやっきになるだけの値うちがあるだろうか、そのために争うだけの値うちがあるだろうか。

これこそ、客観的には、コルホーズと闘争する農村の資本主義的分子に『新しい』理論的武器をあたえることを目的とする今一つの理論である。……

小農民的、個人主義的な農村に対する社会主義的都市の指導的役割が大きく、非常に重要なことは、うたがない。農業を変革する工業の役割は、まさにこのことを基礎としている。だが小農民的な農村が社会主義建設の事情において、自分でひとりで都市のうしろからついていくためには、この要因だけで十分であろうか。いや十分ではない。……

資本主義のもとで農村が自然成長的に都市のうしろからついていったのは、都市の資本主義経済と農民の小商品的個人経済とが本質的には同一型の経済だからである。……

小商品農民経済は、本質的には、都市の社会主義的生産とも同一の型のものであると、いえるであろうか。マルクス主義と手を切らずには、明らかにそんなことはいえない。……

したがって小農民的な農村を社会主義的都市のうしろについていかせるためには、そ

のほかのことはともかくとして、社会主義的都市を先頭として農民の大多数をひきいていくことのできる社会主義の基地として、社会主義的大経営を、ソフホーズとコルホーズの形で農村にうえつけることが必要なのである。」³⁾

農民の全面的集団化政策は、同時に階級としての富農の絶滅政策である。スターリンは1929年の夏までソ連共産党が採っていた富農の抑制ないし駆逐政策から、階級としての富農の絶滅政策をばはつきりと区別している。富農の抑制政策では、階級としての富農は、なおしばらくひきつづいて存在すべきものとされていた。ところが階級としての富農の絶滅政策では、「公然たる戦いにおいて、この階級の反抗を撃破し、彼らから、その生存と発展との生産上の源泉（土地の用役権、生産用具、土地の賃借権、労働雇傭の権利、その他）を奪うことが必要である。」とスターリンは指摘している。⁴⁾

この富農絶滅政策が大規模なテロを伴ったことはいうまでもない。スターリンはソ連共産党第16回大会に対する中央委員会の政治報告において、「社会主義建設の分野での弾圧は、攻撃の必要な要素ではある」⁵⁾とのべ、さらに「数万、数10万の富農を逮捕して流刑に処することはできる。しかし、それと同時に新しい経営形態の建設をはやめ、古い資本主義的経営形態を新しい経営形態におきかえ、農村の資本主義分子の経済的存在と発展の生産上の根源を掘りくずし一掃しなければ、富農はやはりまた復活して成長するであろう。」⁶⁾と説いて、大量逮捕と流刑の必要を認めている。

このように、階級としての富農をテロと集団化とによって絶滅するという政策は、スターリン独裁の最も劇的な段階であった。しかし独裁理論の発展という見地からは、搾取者階級の抑圧と収奪とは、格別新しいことではない。それよりも、地主と資本家という二大搾取階級がつとに打倒され、収奪されたソ連において、階級闘争はますます激化するというスターリンの理論の方が、一層注目に値する。スターリンは、「階級が廃止されるようになるには、プロレタリアートの独裁のもとで、階級闘争がなくなり、解消しなければならないと考えている」⁷⁾ブハーリンを排して、「階級はがんきような階級闘争によってはじめて廃止されるものであり、そしてこの階級闘争はプロレタリアートの独裁の諸条件のもとでは、プロレタリアートの独裁以前よりも一層激烈になる」⁸⁾というようにレーニンを解釈している。スターリンは、死滅直前の搾取階級との闘争が激化する理由を次のように説く。

「寿命のつきた階級が反抗するのは、彼らが、われわれより強くなったためではなく、社会主義が彼らよりも急速に成長し、彼らがわれわれよりも弱くなりつつあるためである。彼らが弱くなりつつあるからこそ、自分の生存の最後の日を予感し、全力をもって、あらゆる手段によって反抗しないわけにいかないのである。

現在の歴史的時機に階級闘争と資本家の反抗が激化する機構は、じつにここにある。」⁹⁾

レーニンが「資本の権力が倒されたあとでも、ブルジョワ国家が破壊されたあとでもプロレタリアートの独裁が樹立されたあとでも、（旧社会主義と旧社会民主主義の俗物どもが考えているように）階級闘争はなくなりません。それは、その形態をかえるだけで、多くの点でかえって一層は激しくなります。」¹⁰⁾とのべたことは、たしかである。しかし内戦と武力干渉の最中にレーニンが主張しているのは、プロレタリアートの独

裁が成立した後も、階級闘争はなくなるということに過ぎない。「一層激くなる」という言葉には、「多くの点で」という限定がついている。ところがスターリンは10月革命後12年近くなつた後、階級闘争が全面的にますます激化するよう印象を与える表現を用いている。ここに、レーニンとスターリンとの間の大きな違いが存すると考えられる。

階級闘争の激化という考え方を展開することによって、スターリンが帰結しようとしたのは、国家権力の強化であった。1933年1月7日のソ連共産党中央委員会と中央統制委員会との合同総会で、第一次5カ年計画の総結果を報告した機会に、スターリンは、国家権力の強化論を次のように説いている。

「一部の同志諸君は、階級の廃絶、階級の無い社会の建設、国家の死滅に関するテーゼを、怠情と寛大の是認、階級闘争の鎮静と国家権力の弱化という反革命的理論の是認であると理解した。このような連中がわが党となんの共通点も持ちえないことは、いうまでもない。これは変質者か二心者であつて、こんなものは党から追い払わなければならない。階級の廃絶は、階級闘争の鎮静によってではなく、その強化によって達成されるものである。国家の死滅は、国家権力の弱化によってではなく、その最大限の強化によってたゞせられるであろう。この強化は、死滅しつつある階級の残存物を徹底的に粉砕するために、また、まだ決して絶滅されていないし、まだ急には絶滅されはしない資本主義的包囲に対する防衛を組織するために、必要なのである。」¹¹⁾

国家の死滅のための、国家権力の最大限の強化というスターリンの理論は、レーニン、スターリンのプロレタリアート独裁理論の発展における画期的な新段階である。この理論の根拠としてあげられているのは、「死滅しつつある階級の残存物を徹底的に粉砕するため」と、「資本主義的包囲に対する防衛を組織するため」との二点である。しかしこの二つの根拠だけでは、国家権力の最大限の強化、すなわち具体的にはスターリン独裁の最大限の強化には、明らかに不十分であつた。そこでこの不足を補うために採り上げられたのが、陰謀理論であつた。1934年のキーロフ事件から、1938年まで、ソ連に暴威をふるったいわゆる血みどろの粛清の真相はまだ明らかにされていない。しかしジノヴィエフ、カメネフ、レイコフ、ブハーリンなどがすべて外敵と通謀する反革命陰謀のかどで逮捕され、処刑されたことは注目に値する。¹²⁾

1939年3月のソ連共産党第18回大会における報告演説で、スターリンがマルクス、エンゲルスの国家死滅論に対してソヴェト国家の存続強化を弁解した時に、まっさきに資本主義による包囲という事実とトロツキストとブハーリン一味の上層部のスパイと陰謀工作とを指摘している¹³⁾ことは、この意味で当然といつてよい。しかしこの報告演説に展開されたスターリンの社会主義国家論の中で、右の点よりもより重要なのは、スターリンがソヴェト国家の経済的・組織的活動と文化的・教育的活動と名づけている諸機能である。これは「新しい社会主義的経済の芽ばえを発展させ、社会主義の精神で、人間を再教育することを目的」¹⁴⁾とするものとなつている。これらの機能が、さきに指摘した独裁権力の創造性と連関しているばかりでなく、その上品な表現にほかならないことは、明かであると思う。

スターリンの国家理論は、資本主義の包囲という特殊条件の下では、搾取者階級の収奪が終っても、国家は死滅しないと主張しているだけではない。第一に国家権力が死滅するためには、最大限に強化されなければならないとし、第二には抑圧、収奪、防衛などの消極的機能のほかに、経済的・組織的活動および文化的・教育的活動という積極的機能を認めたところに、スターリンの国家理論の特徴がある。¹⁵⁾ いかえれば、スターリンが1933年から1939年までの間に展開した国家理論は、プロレタリアート独裁論の一大修正であり、発展であったのである。¹⁶⁾

註

- 1) スターリン全集第11巻233頁
- 2) 同上 237頁
- 3) 同上 第12巻169—171頁
- 4) 同上 204頁
- 5) 同上 334頁
- 6) 同上 334頁
- 7) 同上 48頁
- 8) 同上 48頁
- 9) 同上 54頁
- 10) レーニン全集第29巻392—393頁
- 11) スターリン全集第13巻234頁
- 12) 旧ソ連共産党史は、「裁判は、トロツキスト・ブハーリン一味の鬼畜の輩が、彼らのご主人である外国のブルジョワの謀報機関の意志を遂行するために、その目的としたことは、党とソヴェト国家の破壊、国防の毀損、外国軍事干渉の促進、赤軍の敗化のための準備、ソ連の分割、ソヴェト沿海州を日本に割譲すること、ソヴェト・白ロシアをポーランドに割譲すること、ソヴェト・ウクライナをドイツに割譲すること、労働者とコルホーズ員が獲得したものを破棄すること、ソ連に資本主義的な奴隷制度を再興すること、であつた。」とのべている。История всесоюзной коммунистической партии (Большевиків), стр. 331—332
- 13) И. Сталин, Вопросы ленинизма, 1939, стр. 601
- 14) Op. cit., стр. 605
- 15) ユーゴスラヴィア共産主義者同盟新綱領は、スターリンの国家理論を次のように批判している。
「プロレタリアートの独裁についてのマルクス・レーニン主義の理論、国家—資本主義の経済的土台を廃止し、新しい社会主義的關係の自由な発展のための政治的および物質的な諸条件を作り出す過程での、労働者階級の闘争の武器としての——の漸次的な死滅についてのマルクス・レーニン主義の理論は、スターリンの国家理論に変えられた。これによれば、国家は社会生活のすべての分野で死滅せず、強化しつづけるのである。この理論では、国家機関に対して、社会主義の建設における誇大な役割が割り当てられているが、もし国家がこういう役割を演じるなら、おそかれ早かれ、かならず社会的要因や経済的要因の発展を束縛するようになるのである。」村田陽一訳『ユーゴスラヴィアの共産主義』50頁。
- 16) マルクーゼが、ソヴェト国家の再実体化について論じていることは、この点に関して注目に値する。H. Marcuse, Soviet Marxism, 1958, p.105

The Development of the Theory on the Proletarian Dictatorship by Lenin and Stalin

MASAMICHI INOKI

In his booklet "What is to be done?", Lenin revised the marxian theory on the proletarian dictatorship into the theory on the party dictatorship against the proletariat. In his opinion, the workers could not have a class-consciousness spontaneously. The class-consciousness had to be planted from without by the party.

After the October Revolution, the communist party became a mass party, and a sharp differentiation between the party-elite and the party-mass emerged. At the 10th party congress in March 1921, coinciding with the Kronstadt uprising, Lenin pushed through the resolution on unity of the party, denouncing the anarcho-syndicalist deviation of the "workers' opposition". By this resolution, Lenin revised the theory on the dictatorship by the party into the theory on the dictatorship by the party-apparatus against the party itself.

The complete defeat of the German Communist party in 1923 confronted the Soviet Russia with the difficult problem of encirclement by the capitalist countries for indefinite future. In his work "Foundations of Leninism", written in April-May 1924, Stalin denied the possibility of the socialism in one country. But at the end of the same year, Stalin changed his opinion, and he pointed out that the Soviet Russia could build the socialism alone in spite of her economic backwardness. In sharp contrast to Marxian theory, according to which the socialism could be built only after the material preconditions were matured, Stalin insisted on the creative power of the dictatorship, which should create the material preconditions from above.

In order to create the material preconditions to the socialist society, Stalin took over the theory on "socialist primitive accumulation" from Trotsky and Preobrazhensky in April 1926.

In the form of the 1st 5 year plan, dating from October 1928 to 1932, Stalin put the socialist primitive accumulation into practice.

In his political report to the 16th party congress, Stalin maintained that the class struggle would be the more sharpened the more exploiters were liquidated. In his opinion the condition for the dying away of the state must be prepared by the highest possible development of the state power. Thus the theory on the withering away of the state was transformed into the completely opposite theory on the demiurgic function of the state by Lenin and Stalin.